



出張報告書

令和 8年 8月 21日

尼崎市議会議長 様

会派名 尼崎市議会 無所属議員の会

代表者氏名 池田 リナ

出張者氏名 高田 真緒

このたび、出張しましたので、次のとおり報告します。

1 出張期間 令和 8年 7月 22日から令和 8年 7月 22日まで

2 結果の概要

用務先 東京都豊島区	報告事項 (この欄には要点を箇条書きにし詳細事項がある場合は別紙添付) 1 東京都豊島区 地域のながりミビリアップメントほか 2 3 4 5	
添付書類 ☒ 出張報告書 ☐ ☐ ☐		備考

3 届出事項の変更等 ☒ なし ☐ あり (内容は裏面に記載)

旅費の精算

☒ 精算額は、令和 8年 7月 15日届け出た額 (29,880 円) と同一額である。

☐ 届出事項の変更等により、別途精算する。(精算額は裏面に記載)

(裏面)

届出事項の変更等の内容

変更等の事項と理由

支 出 額	
精 算 額	
支出 差引 額 戻入	

変更前と後の日程

月	日	日	日	日	日	日	日
前 発着地							
後							
前 経 路							
後							
前 用務先							
後							
前 宿泊先							
後							

研修報告書

日時 2026年7月22日

出張者 尼崎市議会 無所属議員の会

鷗田 真緒

報告者 尼崎市議会 無所属議員の会

鷗田 真緒

視察テーマ 地域のつながりをどうアップデートするか～町会・町内会・自治会再考講座～

研修先：廣瀬行政研究所

講師：二宮 雄岳氏（株式会社エンパブリック）

1. 研修の目的

地域活動を長年支えてきた地縁組織の構造や、その活動を支える人々の実態を理解した上で、これからの時代に合った「地域のつながり方」「地域ビジョンのつくり方」を学ぶことを目的としています。あわせて、町会・自治会・町内会がどのような経緯で成立し、どのような課題を抱えているのかを構造的に理解し、効果的な支援策を考えるための視点を得ることも目的としています。

2. 地域活動を支えてきた構造

(1) 地域活動を支えてきた構造

地域活動は、脈々と地域を守ってきた地縁組織（歴史や文化を引き継いできた組織）によって支えられています。その多くはボランティアな活動によって運営されており、雇用関係でも、業務でもない活動です。構造を支える要素は「地縁団体」を中心に、①行政との関係、②地域の文化・歴史・思い、③職業体（企業等）、④人間関係、⑤組織運営、の5つ（4+1の側面）に整理されます。行政とのつなぎ役として、地域を代表する組織の役割を担い、行政からの依頼業務を担っている面もあります。現状の課題として、「どのようにして参加する側から支える側に入っていくか」という、内と外のギャップが挙げられました。

(2) 目に見えない“ひと”と“ひと”のつながり

かつての地域社会は、何代にもわたり同じ場所で暮らし、互いをよく知る人たちによって形成された地縁コミュニティでした。長い時間をかけた付き合いの中で、「あの家はこんな仕事をしている」といった情報や、目に見えない「地域の掟」的な合意形成が自然に積み重ねられてきました。人と人とのつながりという本質は今後も変わりませんが、社会やライフスタイルの変化により、従来の時間軸を前提とした関係構築は難しくなっています。だからこそ、つながりづくりを意図的に設計した「場」の設定が必要です。

(3) 「意図した場の設定」が必要になる理由

かつては長い時間をかけて行ってきた関係構築を、短時間で行うことは、非効率ではなくむしろ便利で合理的な手段です。人は心理的安全性が確保されていないと、自分を開示しません。地域の従来のやり方（時間をかけた関係構築）を、現代の価値観・ロジックとして無条件に重視することはできません。以上の理由から、地域の中に意図的につながりをつくる「場」を設定することが不可欠です。

(4) 未来を描く＝ビジョンづくりのポイント

実現してほしい・実現したい状態を具体的に想像します。正しい・間違いはありません。実現可能性よりも「こうなったらいいな」という思いを、お互いに否定せず話すことが大切です。地域にあるものを活かします。ないものねだりではなく、地域にある良い面・可能性を引き出すものを考えます。現状の裏返しにしません（例：「つながりがない」→「つながりを増やす」という単なる裏返しの発想を避け、どんな風につながれたらよいかを想像します）。

(5) 地域のビジョンづくりを活かすために

現状や課題は、既存の関係性に縛られがちで、「言っても仕方ない」「どうせ変わらない」といった諦めが生まれやすいものです。未来については、日頃考えていることを良い意味で無責任に話すことで、多様な立場の人が参加しやすくなります。若い人・新しい人も参加しやすい場をつくることが重要です。ビジョンを話し合う場を通じて、お互いを知り、多様な人との関係づくりが進みやすくなります。

3. 町会・自治会・町内会の「いま」を理解する

(1) 自治会・町内会等の定義（総務省）

総務省の定義では、自治会・町内会等とは「町又は字の区域その他の市町村内の一定の区域に住所を有する者の地縁に基づいて形成された団体」であり、「区域の住民相互の連絡、環境の整備、集会施設の維持管理等、良好な地域社会の維持及び形成に資する地域的な共同活動を行っている団体」とされています。

主な活動内容として、防災・交通安全・夜警などの「安全安心」、清掃・ゴミ管理などの「気持ちよく暮らせる環境づくり」、祭り・交流イベントなどの「一緒に楽しむ・つくる」、地域福祉・慶弔などの「助け合い」が挙げられます。いずれも、地域を共にする人が、一人ではできないことを行うための仕組みとして機能してきました。

(2) 町内会・自治会の歴史的な原型

町内会・自治会の原型は関東大震災をきっかけとした地域の助け合いにあるとされ、その後、昭和15年の内務省令により整備が拡充され、「区域内会」として組織することとされ、加入が事実上の義務とされました。その下部組織として隣組が組織化され、配給切符の割り当てや防災活動、資源回収など、行政の指示のもとで活動が行われていました。当時のつながりは「生きるための前提」であり、国策を実現するために国民を管理・統制する強制力を持った組織という側面がありました。終戦後、町内会はGHQの指令により「軍国主義の温床」として一度解体されました。その後、戦後の混乱期中で、行政の力が及ばない地域における互助組織として再結成が進みました。現在の町内会・自治会は、加入・脱退が任意であり、地域住民による自主的な自治組織として、親睦・助け合い・慶弔などの活動や、地域課題への自主的な対応を行っています。

(3) 地域のつながりの「前提」にあったもの

冠婚葬祭、農作業、子育て、看取り、防災（消防団）など、生活に不可欠な機能の多くが、近所の協力なしには成り立たない時代がありました。かつては「つながり＝生きるための前提」であり、専業主婦や地元就労者など、日中に地域にいる人が時間をつくって無償で担うものでした。地域で生まれ育ち、長く住む以上、離れられないという側面、また同調圧力やプライバシーの放棄といった側面も、「そういうものだ」として受け止められてきました。

(4) 自治会・町内会の解散・休止に思うこと

時代も社会も大きく変化しており、地域の状況も変わっています。しかし「町内会は変えられない」と考えていないでしょうか、という問いかけがありました。「これまでの自治会」「前からやっているから」「役所に言われたから」という発想が活動の前提にあると、活動や発想が硬直化しやすくなります。「地域の変化に対応する」「自分たちのやり方を変える」ことができないために、解散・休止という選択がなされているのではないか、という指摘がありました。

(5) 「誰かの声」「要望」への対応で動いていませんか

「ああしてくれ、こうしてくれ」といった要望にいくら応えても、不満はなくなりません。それは地域の課題そのものが解決されていないためです。負担のない運営には、体制や仕組みがなければ実現できません。運営のスリム化には、何をやめて何を残すかについての合意形成が必要です。防災活動や備蓄には、いざという時に機能する仕組みが必要です。新しい人が参加し、役割分担をしなければ活動は続きません。自分たちの活動が「何のために」あるのかを確認し、現状を把握して改善点を洗い出し、課題を解決できる運営力を高める取り組みを行うことが重要です。

こうした「問題対応」から、「新しい仕組みづくり」への発想の転換が求められています。

(6) 多くの人は問題意識を持っているのに、なぜ変えるのは難しいのか

「今のままでは難しい、なんとかしたい」という思いがあっても、「何から手をつけたらよいか分からない」という状態に陥りがちです。新しいことをすると、いろいろな面倒（複雑さ）がありそうだと感じてしまいます。何が起きているのかは明確でも、解決すべき課題がどこにあるのかが見えていない、という状態も手が止まる要因の一つです。

会社は「契約」を根本とし、活動目的や指揮命令系統が明確で、強い人事権に基づく強制力を持っています。一方、町内会・自治会は「人間関係」や長年かけて培われてきた合意形成を根本としており、効率や合理性だけでは測れない「時間軸」や「人間関係」といったあいまいさを内包しています。この両者の成り立ちの違いを理解しないまま比較してしまうと、「もやもや」した違和感が生まれやすいことが指摘されました。

4. 気づき・学び

「つながらないといけない」という義務的な発想は、かえって負担（しんどさ）を生みます。「つながる」ことを強制ではなく、自然に生まれるメリット（知り合いが増える、地域を多角的に知れる、興味関心のあることに参加して嬉しかった、等）として捉え直す視点が重要です。

お互いに否定しないという姿勢を、個人の心がけにとどめず、地域の価値観・地域のアジェンダとして共有していく必要があります。

NPO と地域団体はそれぞれ別の思いを持って活動しており、その違いを前提とした関わり方を考える必要があります。

町内会・自治会は、戦前の統制組織としての成り立ちを持ちながら、戦後は住民による自主的な互助組織として再構築されてきた歴史があり、その両面を理解した上で今後のあり方を考える必要があります。行政は地域の行事に補助金・助成金を出していますが、どのようなコミュニティの醸成を望んでいるのか、その効果をどう捉えるのかを改めて問い直す必要があります。

5. 今後への活かし方

地域活動において「参加する側」から「支える側」へ移行するプロセスを、意図的に設計された場を通じて後押ししていきたいと考えます。既存の関係性に縛られた現状課題の議論だけでなく、否定しない前提でのビジョン（未来像）を話し合う場を積極的に設けたいと考えます。また、地縁団体・行政・中間支援・企業など、異なる特性を持つ主体をつなぐ「境界越境者」としての役割を意識して活動に取り組みたいと考えます。

コミュニティ運営キャンパスのような「現状を見るための鏡」を活用し、地域の課題を構造的に把握した上で、問題対応にとどまらない新しい仕組みづくりへの発想転換を進めていきたいと考えます。進めるにあたり、会社組織などとの成り立ちの違いを踏まえた上で、町内会・自治会に合った合意形成や運営のあり方を、地域全体を見渡せるコーディネーターの視点も交えながら検討していきたいと考えます。

地域のつながりを どうアップデートするか ～町会・町内会・自治会再考講座～

7月22日(水) in 東京

10:00～12:30

町会・町内会・自治会の「いま」を理解する

— 課題の構造を読み解き、効果的な支援策を考えるために

1. 町会・町内会・自治会などの地縁コミュニティが担ってきた役割
2. 社会・暮らしの変化が引き起こす「しんどさ」の正体は？
3. 加入率低下や担い手不足に向き合うには？
4. 自分の地域の町会・町内会・自治会の特徴を把握しよう
5. 運営改善の取り組み事例と実施のポイント
6. 個人頼みになりがちな町会・自治会の「運営」の見える化を
7. 地縁組織にも、自治体の支援策にも求められる「アップデート」

13:30～16:00

地域の未来をつくるつながり方

— 多様性を活かすコミュニティへのアップデートの進め方

1. 「地域のつながり」をアップデートしていく視点
2. 地域にある「多様なつながり」を活かすために
3. 「つながる／つながらない」に2分しないプロジェクト型の関わり方
4. 防災・福祉・子育てなど、分野別に見るコミュニティの再設計の考え方
5. 地域のつながりのアップデートの進め方
6. まずは地域の人がお互いをよく知ることから
7. つながりの拠点「まちスタジオ」を始めよう



講師：二宮 雄岳 【株式会社エンパブリック
コミュニティ活性化コーディネーター】

金融機関に24年間勤務後、2014年10月から岩手県で復興支援組織「釜援隊」に参加。官と民、個人と組織、制度と制度、ビジネスとソーシャルなど、“はざま”で価値を創造するコーディネーターとして活動し、住民自治組織の立ち上げ、運営支援に多く携わる。その実践知を全国に広げるべく2024年9月、エンパブリック(代表：広石拓司)に参画。都心から地方まで地域コミュニティの再構築をサポートする活動に取り組む。

(株)廣瀬行政研究所